

K 入声音漢語の受容と定着

二戸 麻砂彦

キーワード 日本漢語・K入声音・装束・さうぞく

はじめに

- 1 K入声音漢語
- 2 枕冊子における諸例の分析
- 3 源氏物語における諸例の分析
- 4 紫日記における諸例の分析
- 5 蜻蛉日記における諸例の分析
- 6 大鏡における諸例の分析
- 7 その他における諸例の分析
おわりに

はじめに

日本漢語の成立過程におけるK入声音漢語の中から「さうぞく(装束)」を取り上げて、その日本語化に際しての特徴的な受容を検討する。平安時代中期を中心とした仮名文献である「枕冊子」⁽¹⁾、「源氏物語」⁽²⁾、「紫日記」⁽³⁾、「蜻蛉日記」⁽⁴⁾、「大鏡」⁽⁵⁾等の使用状況を分析し、四段動詞連用形として認定されてきた「さうぞき」が上一段動詞「着る」と複合する場合の特別な例であること、また「さうぞかせ」「さうぞけ」も別の観点から分析が必要であることを指摘する。

1 K入声音漢語

日本語における漢語の受容と定着のなかでは、どのように日本語の特徴に馴化させていくかという問題があった。開音節構造CVを特徴とする日本語に対して、MNYL⁽⁶⁾に代表される音節構造の中国語とでは、大きな隔りがある。いわゆる入声音を有する漢語の場合、閉音節である末子音を、概略は次のように処理し、受容してきた経緯がある。

ㄑ/ 「キ」あるいは「ク」

/p/ 「フ」

/ㄒ/ 「チ」あるいは「ツ」

中国語音韻史上における等韻学の術語という韻母に従って分類すると、末子音がㄑである漢語としては、屋・沃・燭・覺・鐸・葉・陌・昔・麥・錫・德・職の各韻所属字が、これに該当する。他の三声調である平・上・去声に比すれば、もともと入声音所属字の数は一般的に少ない。そのため、仮名文献にあらわれるK入声音漢語もかなり少ない実態がある。いま「枕冊子」と「源氏物語」から、見出し語のみを掲げる。⁽⁷⁾

「枕冊子」

屋韻 ふそく(風俗)・きく(菊)・すくせ(宿世)・すくろく(双六)

燭韻 しそく(紙燭)・さうそく(装束)・そく(俗)

陌韻 ひやうし(拍子)・かうし(格子)・かく(客)・もかう(帽額)・

けいし(履子)

昔韻 尺せん(積善) 寺・やく(役)

職韻 こくらく(極楽)・しき(職)・しきし(色紙)・さうしき(雑色)・

けしき(気色)・しき(式)の神・しきふ(式部)・おく(憶)せ

「源氏物語」

屋韻 きく(菊)・ふすく(粉熟)・しうとく(宿徳)・すうとく(宿徳)・

すくえう(宿曜)・すくせ(宿世)・すくろく(双六)

燭韻 こく(曲)・くゑそく(花足)・しそく(紙燭)・さうそく(装束)・

くゑそく(眷属)・そくらう(贖勞)・そく(俗)・そくひしり(俗

聖)はうそく(放俗)

陌韻 ひやうし(拍子)・はうし(拍子)・かうし(格子)

昔韻 やく(益)・さか(釈迦)・たいしやく(帝釈)・さくはち(尺八)・

やく(役)・さうやく(雑役)

錫韻 尺定(錫杖)・外尺(外戚)

職韻 こくねち(極熱)・こくらく(極楽)・大こくてん(大極殿)・そ

く(職)・すりしき(修理職)・いうそく(有職)・けしき(気色)・

しきふきやう(式部卿)・しき(儀式)・とむしき(屯食)・おく(憶)す

やはり、中国語の末子音を「キ」あるいは「ク」という開音節で受容する原則が貫かれている。ただ、その中に「ウ」あるいは「イ」に音変化した表記を示すものがある。これらは、よりいつそう日本語に馴化した漢語受容の過程を見せるものであり、ウ音便やイ音便の音変化と同じレベルでとらえることのできる現象といえる。漢語が日本語に大きな位置を占め貢献をするようになった結果、本来は和語などで起きていた音変化を漢語にも及ぼすような影響が出ていたと推測される。整理したうえで、代表的な用例を「源氏物語」と「枕冊子」とから掲げておく。

宿徳 すくとく↓すうとく(源1例)

拍子 ひやくし・はくし↓ひやうし(源6例)・はうし(源7例/枕3例)
格子 かくし↓かうし(源30例/枕17例)
帽額 もかく↓もかう(枕4例)
履子 けきし↓けいし(枕4例)

A それは、かたちもいとうるはしうきよらに、しうとくにて、際殊なる様ぞし給へる。兵部卿宮ぞいといみじくおはするや。女にて馴れ仕うまつらばやとなんおぼえ侍る(手習・大成204405/首書1278-13) *大島本では「すうとく」

B 宮中などにて、かやうなる秋の月に、御前の御遊の折にさぶらひあひたる中に、物の上手とおぼしき限取りゞに打合せたるひやうしなど、こととしきよりも、由有りとおぼえある女御更衣の御局ゞの、をのがじゞは挑ましく思ひ、うはべの情を交すべかめるに、夜深き程の人の氣しめりぬるに、心やましく掻い調べ、ほのかにほころび出でたる物の音など、聞き所あるが多かりしかな。(椎本・大成154410/首書096010)

C 西に寄りて向かひて立ちぬ。次々出づるに、足踏みをはうしに合はせて、半臂の緒つくるひ、冠・衣の領など、手もやまずつくるひて、(枕冊子上31902第百四十二段)

D うちしめりたる御匂ひのとまりたるさへ、うとましく思さる。人ゞみかうしなど参りて、女房「この御禱の移香、言ひ知らぬものかな。いかでかく取り集め、柳が枝に咲かせたる御有様ならん。ゆかし」と聞えあへり。(薄雲・大成062908/首書038909)

E 御簾のもかう、総角などに上げたる鈎の、きはやかなるも、けざやかに見ゆ。(枕冊子下09603第百一段)

F また、清げなる童女などの、相どもの、いとあざやかなるにはあらで萎えびみたるに、けいしひの、艶やかなる草に土多く付きたるを履きて、白き紙に大きに包みたるもの、もしは、箱の蓋に草子どもなど入れて、持ていくこそ、いみじう呼び寄せて見まほしけれ。(枕冊子下 130-02 第二百二十六段)

日本漢語としての受容と定着が確実に進むにつれて、右のような音変化も生じるようになったと思われる。そのような状況を考慮すると、やはりK入声音漢語である名詞「さうぞく(装束)」と、四段動詞連用形と認定されている「さうぞき」の関連性についても、日本漢語の受容と定着という観点から、再考の余地があるのではないかと想定される。加えて同じ四段動詞の未然形「さうぞか」や已然形「さうぞけ」に関しても、同じ観点から分析を加えたい。

2 枕冊子における諸例の分析

まず、名詞「さうぞく(装束)」と認定される19例を掲げる。基本的には「装飾すること」を意味している。人の服装や飾りばかりではなく、牛車や楽器を使用できるように整える場合にも使われる。複合名詞化した002・010「つばさうぞく」や003「かりさうぞく」など、意味を限定した用例も含まれる。また、主家よりの下賜品として015「女のさうぞく」という用例がある。上達部に賜る禄には、唐衣・裳・表着・打衣・五つ衣・単衣・袴など一式の「女装束一襲」を常とする。当該例は勅使とはいっても六位蔵人であるから、そこまでではないであろう。

001 姫宮の御方の童女のさうぞく、つかうまつるべき由おほせらるるに、「この相のうはおそひは、なにの色にかつかうまつらすべき」と申すを、また笑ふもことわりなり。(枕冊子上 033-11 第五段)

002 たまさかには、つばさうぞくなどとして、なまめき化粧じてこそは、

あめりしか。(枕冊子上 083-03 第三十段)

003 廂の簾高う上げて、長押のうへに、上達部は奥に向きて、ながながとゐたまへり。その次には、殿上人・若君達、かりさうぞく・直衣などもいとをかしうて、え居もさだまらず、ここかしこに立ちさまよひたるも、いとをかし。(枕冊子上 085-09 第三十二段)

004 殿司の、顔愛敬づきたらむ、一人持たりて、さうぞく時に随ひ、裳・唐衣など今めかしくて、ありかせばやとこそおぼゆれ。(枕冊子上 115-11 第四十四段)

005 暁に帰らむ人は、「さうぞくなど、いみじううるはしう、烏帽子の緒、元結かためずともありなむ」とこそ、おぼゆれ。(枕冊子上 134-01・第六十段)

006 殿、いつしか抱き取りたまひて、膝に据ゑたてまつりたまへる、いとうつくし。狭き縁に、所狭き御さうぞくの、下襲ひき散らされたり。(枕冊子上 250-14 第九十九段)

007 つきづきしき郎等に、さうぞくをかしうしたる餌袋抱かせて、小舎人童ども、紅梅・萌黄の狩衣、いろいろの衣、おし摺りもどろかしたる袴など着せたり。(枕冊子上 280-12 第一百十五段)

008 女房のさうぞく、裳・唐衣をりにあひ、たゆまでさぶらふかな。御簾のそばのあきたりつるより見入れつれば、八、九人ばかり、朽葉の唐衣・淡色の裳に、紫苑・萩などをかしうて、居並みたりつるかな。(枕冊子上 323-01 第一百三十六段)

009 季の御読経・御仏名などの、御さうぞくの所の衆。(枕冊子下 028-10・第一百四十九段)

010 四十余ばかりなる女の、つばさうぞくなどにはあらで、ただひきはこへたるが、(枕冊子下 031-09 第百五十一段)

011 御形の宣旨の、主上に、五寸ばかりなる殿上童のいとをかしげなるを作りて、みづら結び、さうぞくなどうるはしくして、中に名書きて、奉らせたまひけるを、「兼明の王」と書いたりけるを、いみじうこそ、興せさせたまひけれ。(枕冊子下 068-09 第百七十五段)

012 昨日は、車一つにあまた乗りて、一藍のおなじ指貫など乱れて、簾解き下ろし、もの狂ほしきまで見えし君達の、齋院の垣下にとて、日のさうぞくうるはしうして、今日は、一人づつ寂々しく乗りたる尻に、をかしげなる殿上童乗せたるも、をかし。(枕冊子下 117-07 第百七十五段)

013 攪き板。さうぞくよくしたる餌袋。唐傘。(枕冊子下 129-04 第百二十八段)

014 万づのことよりも、わびしげなる車に、さうぞくわるくて物見る人、いとどかし。(枕冊子下 130-07 第百二十段)

015 「今日のは、ことさらに」とて、殿の御方より、緑は出ださせたまふ。女のさうぞくに、紅梅の細長添へたり。(枕冊子下 183-13 二百六十段)

016 人々には見えたまはねば、いぶせき心ちす。さしつどひて、かの日のさうぞく・扇などのことを、いひあへるもあり、また挑み隠して、「まろはなにか。ただ、あらむにまかせてを」などいひて、「例の、君の」など、憎まる。(枕冊子下 184-11 二百六十段)

017 日は、いとちらかなれど、空は緑に霞みわたれるほどに、女房

のさうぞくの、匂ひ合ひて、いみじき織物・色々の唐衣などよりも、なまめかしう、をかしきこと、かぎりなし。(枕冊子下 198-01 二百六十段)

018 単衣は、白き。日のさうぞくの、紅の単の相など、かりそめに着たるはよし。されどなほ、白きを。(枕冊子下 212-05 二百六十五段)

019 男は、女親亡くなりて、男親の一人ある、いみじう思へど、心わづらはしき北の方出で来て後は、内にも入れ立てず、さうぞくなどは、乳母、また故上の御人どもなどして、せさす。(枕冊子下 252-03 二百九十五段)

私的な場面などでは、うち解けた服装をすることもあろうが、公の場では、正式な晴れの服装を必要とすることがある。いわゆる束帯姿、012・018に見える「日のさうぞく」がまさにこれである。012を例に取れば、昨日のうち解けた姿とは大いに変わって、晴れの束帯姿も麗しくして、行列に加わっている君達を描いている。これら19例から、漢語「装束」を日本語として受容する場合にも、端正にあるいは正式に着飾るという意味が定着していったと認められる。

名詞用法の確立とともに、漢語「装束」を動詞として使う場合には、サ行変格活用の形を用いることがある。すでに掲げた名詞用法の諸例中、002・007・011・012・013については、サ変動詞の用法に準じるとしてもいい。括弧で括った部分を挿入と解釈できるからである。

002 つばさうぞく(など)して

007 さうぞく(をかしう)したる餌袋

011 さうぞく(などうるはしく)して

012 日のさうぞく(うるはしう)して

013 さうぞく(よく)したる餌袋

これら以外、次の4例がサ変動詞の用法に該当する。漢語「装束」を動詞化して、「装飾する」「正装する」の意味に使われる。021「さうぞくし」は、五位や六位の随人が主人の外出に供奉するため正装し、壺やなぐひを背に負ったさまを述べている。022「日のさうぞくし」は、君達が晴れの正装することを意味しており、先の012「日のさうぞくするはしうして」と近似した用法である。023は複合動詞「さうぞくしたち」という認定もできる。新嘗会や大嘗会に際して行われる女樂においては、公卿・殿上人・受領から五節の舞姫が差し出された。その「かしづき」十二人には唐衣を、童女には汗衫を着せた。それが「すっかり着付けし終わって」の意味である。また020は、物品である数珠に対する装飾を施すことである。高価な材料を使って飾った数珠をいう。数珠の玉は黒柿・無患子・紫檀などを多く、なかでも菩提子は最上の材料とする。水晶・琥珀・瑪瑙などを加えた装飾性の高い物を指すか。

020 久しうあはざりつる人の詣であひたる、めづらしがりて、近うゐより、ものいひうなづき、をかしき言など語り出でて、扇ひろうひるげて、口にあてて笑ひ、よくさうぞくしたる数珠かいまさぐり、手まさぐりにし、こなたかなたうち見やりなどして、車の悪し良し褒め毀り、なにがしにて某の人のせし八講、経供養せしこと、とありし事、かかりし事、いひくらべゐたるほどに、この経の詞ききも入れず。(枕冊子上081-04第三十段)

021 五位・六位などの、下襲の裾はさみて、笏のいと白きに、扇うち置きなどいきちがひ、また、さうぞくし、壺やなぐひ負ひたる隨身の、出で入りしたる、いとつきづきし。(枕冊子上131-05第五十七段)

022 主殿寮の官人、長き松明を高くともして、領はひき入れていけば、さきはさしつけつばかりなるに、をかしう遊び、笛吹きたてて、心ことに思ひたるに、君達、日のさうぞくして、立ちどまり、物いひなどするに、供の隨身どもの、前駆をしのびやかに短う、おのが君

達の料に逐ひたるも、遊びにまじりて、常に似ずをかしうきこゆ。(枕冊子上154-02第七十二段)

023 辰の日の夜、青摺の唐衣・汗衫を、みな着せさせたまへり。女房にだに、かねてさも知らせず、外の人には、ましていみじうかくして、みなさうぞくし立ちて、暗うなりにたるほどに、持て来て、着す。赤紐をかしう結び下げて、いみじう瑩したる白き衣、型木の絵は、画に描きたり。織物の唐衣どもの上に着たるは、まことにめづらしく、なかに、童女は、まいてすこしなまめきたり。(枕冊子上205-09第八十五段)

ここまで、枕冊子における漢語「装束」を名詞およびサ変動詞として受容した諸例を俯瞰してきた。名詞形と動詞形との用法により、日本語表現の上では当面の環境が形成されたはずである。ところが、これとは別の用法が指摘できる。これまでは四段動詞の連用形として処理されてきた「さうぞき」である。該当する8例を掲げる。

024 あやしう躍りありくものどもの、さうぞき仕立てつれば、いみじく「定者」などいふ法師のやうに、練りさまよふ。(枕冊子上025-13第二段)

025 さび、「まことに寅の時か」と、さうぞき立ちてあるに、明け果て、日もさし出でぬ。(枕冊子下195-07第二百六十段)

026 大にはあらぬ殿上童の、さうぞきたてられて歩くも、愛し。(枕冊子下021-06第四百四十四段)

027 「待つべきにもあらず」とて、走らせて、土御門さまへやるに、いつのまにかさうぞきつらむ、帯は、首のままに結びて、「しばししばし」と追ひ来る。供に、侍三四人ばかり、ものものはかで走るめ

り。(枕冊子上228-09第九十四段)

028 衣うへぎまに引き反しなどしたるもあり、裳・唐衣など、ことごとしくさうぞきたるもあり、深沓・半靴などはきて、廊のほど沓すり入るは、内裏わたりめきて、またをかし。(枕冊子上274-12 第百十五段)

029 また、夜などは籠もらで、人々しきひとの、青鈍の指貫の綿入りたる、白き衣どもあまた着て、「子どもなめり」と見ゆる若き男のかしげなる、さうぞきたる童などして、侍などやうの者どもあまたかしまり、居念じたるも、をかし。(枕冊子上280-01第百十五段)

030 宣言の御使にて、斉信の宰相中将の、御棧敷へまゐりたまひしこそ、いとをかしう見えしか。ただ、隨身四人、いみじうさうぞきたる馬副の、細く白く仕立てたるばかりして、二条の大路の、広く清げなるに、めでたき馬をうち早めて、急ぎまゐりて、すこし遠くより下りて、そばの御簾の前にさぶらひたまひしなど、いとをかし。(枕冊子上289-08第百二十二段)

031 松の木立高きところの、東・南の格子上げわたしたれば、涼しげに透きて見ゆる母屋に、四尺の几帳立てて、その前に円座置きて、四十ばかりの僧のいと清げなる、墨染の衣・羅の袈裟、あざやかにさうぞきて、香染の扇をつかひ、せめて陀羅尼を読みぬたり。(枕冊子下268-05 一本二十三)

四段動詞	連用形「さうぞき」	5例
四段動詞	連用形「さうぞきしたて」	1例
四段動詞	連用形「さうぞきたち」	1例
下二段動詞	連用形「さうぞきたて」	1例

まず、四段動詞と認定されている「さうぞき」について見ると、4例

すべてが連用形であることがわかる。しかも、接続助詞「て」、あるいは完了の助動詞「たる」に後続する点に注意を払わなければならない。その意味するところは、サ変動詞形「さうぞくし」の場合と変わらず、「装飾する」「正装する」である。いわば活用も限定的であり、選択される表現も幅が狭い。枕冊子では該当する個体数が少ないため、断言するまでには至らないが、先んじて次章の源氏物語を参看すると、同じような傾向がうかがえる。

複合動詞と認定するものは3例ある。その中で、025「さうぞきたち」を、サ変動詞形023「さうぞくしたち」と対比してみると、同じ「すっかり着付けし終わって」の意味であることがわかる。下二段動詞「さうぞきたて」も同種と思われる。さらに、024四段動詞「さうぞきしたつ」についても、同じ意味を表していると認められる。ここで興味深いのは、その音形の類似性である。

さうぞく	し	たち	(サ変動詞形)
さうぞき	し	たち	(四段動詞形)
さうぞき	ゆ	たち	(四段動詞形)

同じ意味を目指すにもかかわらず、近似した音形で三種類の用法があるのは不自然さを拭えない。一般的に、漢語を動詞化する場合にはサ変動詞形を採用する。枕冊子においても、多くのサ変動詞形を指摘できる。(8)

【一字サ変動詞】

憶せ・感し・興し・具し・屈し・啓す・困し・鎖す・参せ・讒し・死し・封し・盆する・瑩し・領し・論すれ・怨し

【二字サ変動詞】

案内し・庚申せ・加持せ・行事する・饗応し・下向し・化粧し・夾算し・御覽す・装束し・進退し・震動し・修法・受領し・消息し・説教す・前駆し・対面し・聴聞する・追従し・嘲弄する・読経し・八講し・舞踏し・用意し圍繞し

【三・四・五字サ変動詞】

結縁講する・威儀具足し・一切経供養せ

やはり、漢語を動詞化する場合にはサ変動詞形を採るといふ方向で定着していった。複合動詞「さうぞくしたち」も例外ではない。ところが、装束は着ることによって成立するわけであるから、「さうぞく+きる」という内在的な意味内容を保持しているはずである。それに加えて、K入声の末子音であるがため、日本漢語としてはクあるいはキで受容する環境もあり、「装束+着(さうぞく+き)」という意識が生まれる可能性があったと認められる。そうなると、連続する力行音は発音のしにくさが表立ってくる。よって、音変化をした「さうぞき」という音形が生じるわけである。さらにいえば、動詞「着る」の連用形が一音節語「き」であり、受容したK入声音形のクやキと、音形上紛れやすい環境にあった点も指摘できる。よって、枕冊子に存する「さうぞき」という語は、四段動詞連用形と見るよりも、名詞「さうぞく」に上一段動詞「着る」の連用形「き」が複合して一語化し、さらに音変化して「さうぞき」が成立したと考えたい。

なお、先に掲げた二字語サ変動詞の中で、K入声漢語「消息」をサ変動詞化した「せうそこし」についても分析をしておく必要がある。可能性からいえば、「さうぞき」と同じような語形が生じることもあり得たはずである。たとえば、漢語「消息」と複合化する力行活用動詞を推測するに、「消息+来」を想定することもできる。すなわち、力変動詞連用形「き」と複合した「せうそこ+き→せうそき」である。しかし、そのような実例は見いだせない。これは源氏物語の場合でも同様である。以下に、枕冊子における「せうそこ」のサ変動詞形を掲げておく。名詞「せうそこ」10例は省略する。

G 「わざとせうそこし、呼び出づべきことにはあらぬや。おのづから、端つ方・局などにあたらむ時も、いへかし」とて、(枕冊子上035-10 第五段)

H 「朝講はてなば、なほいかで出でなむ」と、うへなる車どもにせうそくすれば、近く立たむがうれしきにや、はやばやと曳き出で、あけて出だすを見たまひて、(枕冊子上090-09 第三十二段)

3 源氏物語における諸例の分析

前章では、K入声音漢語「装束」の受容と定着に関して、枕冊子の状況を分析した。そのなかで、四段動詞連用形と認定されてきた「さうぞき」については、上一段動詞「着る」の連用形とK入声音末子音「く」が重複した「さうぞく+き」の複合形を内在し、さらに音変化を経て「さうぞき」となった可能性を指摘した。源氏物語についても、この観点からの考察を加えたい。

まずは、漢語「装束」を一般的に動詞化する場合、すなわちサ変動詞形5例を掲げる。未然形2例と連用形3例であるが、基本的な意味は「装飾」「正装する」となる。人ばかりでなく、034や036のように物品である数珠・車を装飾する用法は、枕冊子でも確認できた。

032 大殿には、今年五節奉り給ふ。何ばかりの御いそぎならねど、童べのさうぞくなど、近くなりぬとて、急ぎせさせ給ふ。東の院には、参りの夜の人人さうぞくせさせ給ふ。殿には大方の事ども、中宮よりも童べ下仕への料まで、えならで奉れ給へり。(少女・大成0694-14 / 首書0425-10)

033 北の方は人知れず急ぎ立ちて、人々のさうぞくせさせ、しつらひなど由々、しうし給ふ。(東屋・大成1804-05 / 首書1120-14)

034 聖、御守に独鈷奉る。見給ひて、僧都、聖徳太子の百濟より得給へりける、金剛子の数珠の玉のさうぞくしたる、やがてその国より入れたる箱の唐めいたるを、透きたる袋に入れて、五葉の枝につけて、紺瑠璃の壺どもに御葉ども入れて、藤、桜などにつけて、所

につけたる御贈物ども捧げ奉り給ふ。(紫上・大成0167-04／首書0425-10)

035 御目のいたう泣き腫れたるぞ、すこし物しけれど、いとあはれと見る時は、罪なう思して、いかで過しつる年月ぞと、名残なう移るふ心のいと軽きぞやとは思ふ、猶心げさうは進みて、空嘆をうちしつ、なほさうぞくし給ひて、小さき日取取り寄せて、袖に引き入れてしめぬ給へり。(真木柱・大成0945-13／首書0572-08)

036 何くれと御物語聞えかはし給ひて、夕つ方宮は内裏へ参り給はんとして、御車のさうぞくして、人々多く参り集まりなどすれば、立ち出で給ひて、対の御方へ参り給へり。(早蕨・大成1692-09／首書1049-13)

次に「さうぞき」の諸例を掲げる。複合語の「うちさうぞき」を含む8例が見出される。最初に掲げた037を解すれば、「いかにも立派に装束をお着けになつてお出かけになろうとする」となり、やはり「装束を着る」という基本的な意味を表している。038～044も同様である。また、枕冊子の分析でも述べたことであるが、「さうぞき」に後続する語は限定されており、接続助詞「て」であるか、完了の助動詞連体形「たる」である。用法上から見ても、表現の幅は狭い。

037 源氏「院などに参りて、いととくまかでなん。かやうにて、おぼつかなからず見奉らば、うれしかるべきを、宮のつとおはするに、こころなくやと、つゝみて過しつるも苦しきを、なほやう、心強く思ひなして、例の御座所にこそ。あまり若くもてなし給へば、かたへはかくものし給ふぞ」など聞え置き給ひて、いと清げに打ちさうぞきて出で給ふを、常よりは目とめて見出して臥し給へり。(葵・大成0303-03／首書0187-05)*大成本文では「うちさうぞき」

038 二条の院には、方々、払ひ磨きて、男女待ち聞えたり。上臈ども皆参り上りて、我も、とさうぞき、化粧じたるを見るにつけても、かの居並み屈したりつる気色どもぞ、あはれに思ひ出でられ給ふ。(葵・大成0318-13／首書0198-05)

039 河原の大臣の御例をまねびて、童隨身を給はり給ける、いとをかしげにさうぞき、みづら結ひて、紫裾濃の元結ひなまめかしう、丈姿と、のひうつくしげにて、十人様殊に今めかしう見ゆ。(濤標・大成0501-01／首書0313-11)

040 山里のつれ々々をも絶えず思しやれば、公私物騒がしき程過して、渡り給ふとて、常より殊にうちけさうじ給て、桜の御直衣にえならぬ御衣引き重ねて、たきしめさうぞき給て、まかり申し給ふ様、隈なき夕日に、いとどしく清らに見え給ふを、女君たゞならず見奉り送り給ふ。(薄雲・大成0611-05／首書0377-02)*別本には異文あり。陽明文庫本「たきしめさうとき」、保坂潤治蔵伝二条為氏筆本「しとけなくたきしめ」

041 御乳母いとはなやかにさうぞきて、御前の物、いろ々々に尽したる籠物檜破子の心ばへどもを、内にも外にも、ことの心を知らぬ事なれば、取り散らし、何心もなきを、いと心苦しう眩きわざなりやと思す。(柏木・大成1250-03／首書0768-08)

042 堂飾り果て、講師まうのぼり、行香の人々、参り集ひ給へば、院もあなたに出で給ふとて、宮のおはします西の廂に覗き給へれば、狭き心地する飯の御しつらひに、所せく暑げなるまで、こと々しくさうぞきたる女房、五六十人ばかり集ひたり。北の廂の簀子まで、童べなどはさまよふ。(鈴虫・大成1292-10／首書0794-05)

043 いと細やかによんとさうぞきて、香のかうばしき事も劣らず、近う寄りて、御衣ども脱ぎ、馴れ顔にうち臥し給へれば、右近「例の御座にこそ」などいへど物も宣はず。(浮舟・大成1873-04/首書1164-13) *大成本文である池田本と榊原家は「しやうそき」、他の青表紙系諸本では横山本・平瀬本・肖柏本・三条西家本が「さうそき」。別本の高松宮家本・陽明文庫本・国冬本「さうそき」

044 あやしけれど、妹尼「これこそは、さは確かなる御消息ならぬ」とて、「いなたに」といはせれば、いと清げにしめやかなる童のえならずさうぞきたるぞ、歩み来たる。円座さし出でたれば、簾のもとについゐて、小君「かやうにてはさうらふまじくこそは、僧都は宣ひしか」といへば、尼君ぞ答などし給。(夢浮橋・大成2064-08/首書1291-09)

次の3例は複合語「さうぞきわけ」である。「装束によって着分ける」ことを意味している。ここでも、語構成の中に「着る」という意味が内在されていること、明らかである。また、後続する語も完了の助動詞「たり」「たる」に限定されている。枕冊子・源氏物語を通して見るに、動詞形「さうぞき」は「さうぞく(装束) + 着(着)」を内在的な形成過程としながら複合語化したとやはり認められよう。しかも、「さうぞきしたて」「さうぞきたち」「さうぞきたて」「さうぞきわけ」の諸例が示すように、さらに「着る」を中核的な用法として複合動詞化しており、これは「さうぞ + 着(着)」という意識を持たせるに至っていると考えてよい。

045 おほとこのばらのわかきみ、かぎりなくかしづきたて、馬ぞひわらはのほど、みなつくりあはせて、やうかへてさうぞきわけたり。雲ぬはるかにめでたくみゆるにつけて、わかきみのかずならぬさまにて物し給ふを、いみじと思ふ。(濤標・大成0501-04/首書0313-13)

046 童、青色に柳の汗衫、山吹襲の相著たり。皆御前にかき立つ。上の女房、前しりへとさうぞきわけたり。(絵合・大成0569-07/首書0351-12) *大成本文は「さうそき」であるが、索引見出し語では「さうぞき」とする。

047 午の時ばかりに、皆あなたに参り給ふ。大臣の君をはじめ奉りて、皆著きわたり給ふ。殿上人なども残りなく参る。多くは大臣の御勢ひにもてなされ給ひて、やむごとなくいくしき御有様なり。春の上の御志に仏に花奉らせ給ふ。鳥蝶にさうぞきわけたる童べ八人、かたちなど殊にと、のへさせ給ひて、鳥には白銀の花瓶に桜をさし、蝶は黄金の瓶に山吹を、おなじき花の房もいかめしう、世になき句を尽させ給へり。(胡蝶・大成0785-12/首書0480-07)

ここまででは、ほぼ枕冊子と同じ「さうぞき」の用法と見てよい。ところが、次に掲げる「さうぞかせ」については、別の視点をも導入しなければならぬ。従来は、四段動詞の未然形「さうぞか」に、使役の助動詞「す」の連用形「せ」が下接した用法と解釈されてきた。すでに見てきたように、K入声音漢語の受容段階では「さうぞく(装束) + 着(着)」が音変化して「さうぞき」を成立させ、さらに「さうぞ + 着」という意識まで持つに至る。可能性を考えると、「さうぞく + かせ」という形成過程を想定できる。使役の助動詞を下接させる用例は、すでに032・033の「さうぞくせかせ」というサ変動詞形にあつて、類似の表現を可能にする下地もあつたといえる。また、他動詞下二段活用を示す024「さうぞきしたて」・026「さうぞきたて」・045～047「やうぞきわけ」も使われていた点を考え合わせると、他動詞の複合語「さうぞかせ」が生じておかしくはない。実際、蜻蛉日記においても2例の「さうぞかせ」が確認できる。これは章をあらためて述べる。当該048の意味は「前々から造らせておられた唐風の船に、急いで設備を整わせて」となる。

048 三月の二十日あまりの比ほひ、春の御前の有様、常より殊につ

くして匂ふ花の色、鳥の声、外の里にはまだ古りぬにやと、珍らしう見え聞ゆ。山のコ木立、中嶋のわたり、色まさる苔の気色など、若き人々ののはつかに心もとなく思ふべかめるに、唐めいたる船造らせ給ける、急ぎさうぞかせ給ひて、おろし始めさせ給ふ日は、雅楽寮の人召して船の楽せらる。(胡蝶・大成0781-04/首書0477-06)

確認のため、名詞形「さうぞく」についても掲げておく。複合語である「かりのさうぞく」「たびのさうぞく」「つばさうぞく」や定型的な用法である「女のさうぞく」を含めて、77例(紙幅の関係で、すべてを掲載できないが049～126に相当する)を数える。見出し語別の一覧を掲げ、代表例を示す。

さうぞく	29例	かりの御さうぞく	2例
そうぞく	3例	たびのさうぞく	1例
しやうぞく	1例	たびの御さうぞく	1例
御さうぞく	27例	つばさうぞく	1例
御そうぞく	2例	女のさうぞく	9例
女の御さうぞく	1例		

049 こゝのしつらひ、いとことそぎたる様に、なまめかしきに、御方々の若き人ども、我も劣らじと尽くしたるさうぞくかたち、花をこきまぜたる錦に劣らず見えわたる。(胡蝶・大成0783-06/首書0478-12) *大島本「さうすく」

050 やがてこれより出で給ふべきを、桂の院に人々多く参り集ひて、こゝにも殿上人あまた参りたり。御さうぞくなどし給ひて、「いとはしたなきわざかな。かく見あらはさるべき隈にもあらぬを」とて、騒がしきに引かれて出で給ふ。(松風・大成0592-07/首書0366-09) *大島本「御さうすく」

051 とりあへたるに随ひて、参らせたり。衣櫃二荷にてあるを、御使の弁は、とく帰れば、女のさうぞくかつけ給ふ。(松風・大成0595-13/首書0368-14) *大島本「女のさうすく」

4 紫日記における諸例の分析

源氏物語と同じ作者、紫式部の紫日記についても分析を試みておく。動詞形については「さうぞき」4例、「さうぞきかへ」1例を見出す。いずれも「装飾する」ことを意味している点では、枕冊子や源氏物語と基本的な用法には相違がない。名詞形「さうぞく」は132～138までの7例である。

127 御膳まいるとて、女房八人、ひとつ色にさうぞきて、髪上げ、白き元結して、白き御盤もてつゞきまいる。今宵の御まかないは宮の内侍、いとものゝしくあざやかなるやうたいに、元結ばえしたる髪のかかりは、つねよりもあらまほしきままして、扇にはづれたるかたはらめなど、いとときよげに侍りしかな。(新日本古典文学大系24・267-03九月十五日)

128 夜ふくるまゝに、月のくまなきに、采女・水司・御髪上げども、殿司・掃司の女官、顔も知らぬをり。みかど司などやうのものにやあらむ、おろそかにさうぞきけさうじつゝ、をどろの髪さし、おほやけゝゝゝしきままして、寝殿の東の渡殿の戸口まで、ひまもなくをしこみてゐたれば、人もゑ通りかよはず。(新日本古典文学大系24・268-02九月十五日)

129 またの夜、月いとおもしろく、ころさへをかしきに、若き人は舟にのりて遊ぶ。色々なるをりよりも、おなじさまにさうぞきたるやうだい、髪ほほど、くもりなく見ゆ。(新日本古典文学大系24・269-13九月十五日)

130 今宵、少輔の乳母色ゆるさる。こゝしきさまうちしたり。宮抱きたてまつれり。御丁のうちにて、殿の上抱きうつしたてまつり給て、みざりいでさせたまへる火影の御さま、けはひことにめでたし。赤色の唐の御衣、地摺の御裳、うるはしくさうぞきたまへるも、かたじけなくもあはれに見ゆ。(新日本古典文学大系24・281-11十一月一日)

131 御乳付つかうまつりし橘三位のおくり物、例の女のさうぞくに、織物の細長そへて、白銀の衣管、包みなどもやがて白きにや。又つゝみたる物そへてなどぞ聞き侍し。くはしくは見はべらず。八日、人々、色々、さうぞきかへたり。(新日本古典文学大系24・271-10九月十八日)

132 「四條の大納言にさしいでん程、歌をばさる物にて、声づかひ、用意入べし」などさゝめきあらそふ程に、こと多くて、夜いたうふけぬればにや、とりわきてもさ々で、まかでたまふ。祿ども、上達部には、女のさうぞくに御衣・御襦袢やそひたらん。殿上の四位は、袷一かさね・袴、五位は袷一かさね、六位は、袴一具ぞ見えし。(新日本古典文学大系24・269-09九月十五日)

133 おほかたのこと々もは、一日のおなじ事。上達部の祿は、御簾のうちより、女さうぞく、宮の御衣などそへて出だす。殿上人、頭二人をはじめて、寄りつゝとる。おほやけの祿は大袷・衾・腰差など、例のおほやけざまなるべし。(新日本古典文学大系24・271-05九月十七日)

134 御乳付つかうまつりし橘三位のおくり物、例の女のさうぞくに、織物の細長そへて、白銀の衣管、包みなどもやがて白きにや。又つゝみたる物そへてなどぞ聞き侍し。くはしくは見はべらず。八日、人々、色々、さうぞきかへたり。(新日本古典文学大系24・

271-10 九月十八日)

135 その日、あたらしく造られたる船ども、さし寄せさせて御覽す。龍頭鷁首の生けるかたち思ひやられて、あざやかにうるはし。行幸は辰の時と、まだあか月より人々、化粧じ心づかひす。上達部の御座は西の対なれば、こなたは例のやうにさはがしうもあらず。内侍の督の殿の御方に、中々、人々のさうぞくなども、いみじうとのへたまふと聞こゆ。(新日本古典文学大系24・274-07十月十六日)

136 五節は廿日にまいる。侍従宰相に、まひ姫のさうぞくなどつかはす。右宰相中將の、五節にかづら申されたる、つかはすつゝみで、宮一よろひに薫物入れて、心葉梅枝をして、いどみきこえたり。(新日本古典文学大系24・289-14十一月廿日)

137 式部の丞資業ぞまいりて、ところ々々のさし油ども、たゞ一人さし入れられてありく。人々のものおぼえず、向かひぬたるもあり。主上より御使などあり。いみじうおそろしうこそ侍しか。納殿にある御衣とり出でさせて、この人々に給ふ。つゝあたちのさうぞくはとらざりければ、さりげもなくあれど、はだか姿は忘れず。おそろしきものから、をかしうともいはず。(新日本古典文学大系24・298-07十二月卅日)

138 その日の人のさうぞく、いづれとなく尽したるを、袖ぐちのあはひわろう重ねたる人しも、御前の物とり入るとて、そこらの上達部・殿上人にさし出でて、まぼられつることぞ、のちに宰相の君など口惜しがり給めりし。(新日本古典文学大系24・322-08正月十五日)

5 蜻蛉日記における諸例の分析

名詞形としては、「さうづく」「さうぞく」「しやうぞく」あわせて4例が存在する。143・144の2例はサ変動詞形、ここでも「さうづく」「わらはさうづくし」となっており、名詞形とともに「さうづく(し)」の形が目立つ。

139 今はとて出で立つ日、わたりて見る。さうづく一領ばかり、はかなき物など、硯箱一よろひに入れて、いみじうさはがしうのしりみちたれど、(新日本古典文学大系24・上073-14 康保二年)

140 来たる男ども、「御車のさうぞくなどもみなしつるを、など今まではおはしまさざらむ」などいふほどに、やう々夜もふけぬ。(新日本古典文学大系24・中158-02 天禄二年)

141 その日になりて、まだしきに物して、舞のしやうぞくのことなど、人いとおほくあつまりて、しきはぎ、出だし立てて、また弓のことを念ずるに、かねてよりゆふやう、「後はさしての負け物ぞ。射手いとあやしう取りたり」などいふに、舞をかいなくやなしてなん、いかならん々々々と思ふに、夜に入りぬ。(新日本古典文学大系24・中109-06 安和二年)

142 ある人々、「なをあやし、いざ人して見せにたてまつらん」などいひて見せにやりたる人、かへり来て、「只今なん御車のしやうぞく解きて、御隨身ばらもみな乱ればべりぬ」といふ。(新日本古典文学大系24・中158-05 天禄二年)

143 つとめて、「供にありかすべきおのこともなどまいらざめるを、かしこに物してとへのへん、さうづくしてこよ」とて出でられぬ。(新日本古典文学大系24・中128-01 天禄元年)

144 祓などいふところに、垂氷いふかたなうしたり。おかしうもある

かなと見つゝかへるに、おとななるものの、わらはさうづくして、髪おかしげにてゆくあり。(新日本古典文学大系24・下208-02 天延元年)

145 胸つぶれて、いまさらになにせんにかと思ふことしげれば、「とくさうぞきて、かしこへおまいれ」とて、いそがしやりたりければ、まづぞうち泣かれける。(新日本古典文学大系24・下234-05 天延二年)

146 「あす春日のまつりなれば、御てぐら出だしたつべかりければ」などて、うるはしうひきさうぞき、御前あまたひきつれ、おどろ々々しうおひ散らして出でらる。(新日本古典文学大系24・下174-04 天禄三年)

147 心地あしうあらねば、例の見をくりてながめ出だしたるほどに、また「おはす々々」とのしりて来る人あり。さならんと思ひてあれば、いとにぎはしく里心ちして、うつくしきものどもさま々にしやうぞきあつまりて、二車ぞある。(新日本古典文学大系24・中145-10 天禄二年)

148 おほやけに相撲のころなり。おさなき人、まいらまほしげに思ひたれば、さうぞかせて、出だし立つ。(新日本古典文学大系24・中125-12 天禄元年)

149 かくてまたあけぬれば、天禄三年といふめり。ことしも憂きもつらきもともに心ちはれておぼえなどして、大夫さうぞかせて出だしたつ。(新日本古典文学大系24・中125-12 天禄三年)

150 三月十五日に院の小弓はじまりて出居などのしる。前しりゑわきてさうぞけば、そのこと大夫により、とかうものす。(新日本古

典文学大系24・下201-01(天延元年)

I 初夜おこなふとて法師そゝけは、戸おしあけて念誦するほどに、時は山寺わざの螺四つ吹くほどになりたり。(新日本古典文学大系24・中139-13天禄二年) *旧岩波文庫本では「さうぞけば」とするが、宮内庁書陵部本には「はらけは」とある。

いわゆる動詞形については145～149が該当する。それぞれ「さうぞき」「ひきさうぞき」「しやうぞきあつまり」が1例ずつ、「さうぞかせ」2例が見出され、枕冊子・源氏物語・紫日記と同様の傾向を示している。ただ、蜻蛉日記で新たに問題となる用例を指摘しなければならぬ。150「わきてさうぞけ」がそれである。従来は四段動詞の已然形と認定してきたが、1～5章における「さうぞき」「さうぞかす」の分析から見ても、再検討を要するのではないかと考えられる。源氏物語における045～047の3例は「さうぞきわけ」を示す諸例である。取り分け、046と対比すれば、類似した表現になっていることがわかる。「前しりへ」を着飾って分けるという意味になろう。当該部分だけを掲げてみる。

046 前しりへと さうぞきわけ たり
150 前しりゑ わきてさうぞけ ば

046は内在的に「さうぞく+き+わ(着分)け」という意識から形成された複合語であり、K入声音漢語の末子音相当部分が力行音「ク」で受容されたため、外形上は下一段活用のごとく見える「さうぞきわけ」を可能にした。この点は繰り返し述べたところである。しかも、後続する語が接続助詞「て」あるいは完了の助動詞「たり」に限定されており、条件節を作る表現が存在しなかった点も考慮しなければならない。そうすると、この「き+わけ」の部分分離して倒置し、条件説を表す「わきて+さうぞけば」を許容できたのではないか。なお、平安時代中期の仮名文献で同種の用例を確認することはできない、すなわち孤例である。この点からも、四段動詞の已然形という認定に難がある。

6 大鏡における諸例の分析

複合語を含む名詞「装束」が15例、サ変動詞形が5例、いわゆる「さうぞかせ」が1例、それぞれ見出される。名詞の場合は、すべて漢字表記されており、仮名レベルでの読みはわからない。「御装束」が9例と多く、他の「装束」「女装束」「狩装束」「御くるまの装束」「から装束」は1例ずつである。また、一例のみであるが、170「さうぞかせ」も見出される。これらは枕冊子・源氏物語・紫日記と同じ用法である。ただし、サ変動詞形については連用形「装束し」以外に、168「装束す」終止形と169「さうぞくせよ」命令形が存在しており、これまでの文献とはやや傾向を異にする部分がある。

151 延喜の、世間の作法したゝめさせたまひしかど、過差をばえしづめさせ給はざりしに、このとの、制をやぶりたる御装束の、事のほかにめでたきをして、内にまいり給て、殿上に候はせ給を、みかど小部より御覧じて、御氣色いとあしくならせ給て、職事をめして、(日本古典文学大系21・第二巻079-14時平・顕忠)

152 故中關白殿東三條つくらせ給て、御障子に哥繪どもかゝせ給し色昏形を、この大貳にかゝせまし給けるを、いたく人さはがしからぬほどにまいりてかゝれなば、よかりぬべかりけるを、關白殿わたらせ給、上達部・殿上人などさるべき人ゝ、まいりつどひてのちに、日たかくまたれたてまつりてまいり給ければ、すこし骨なくおぼしめさるれど、さりとてあるべきことならねば、かきてまかで給に、女装束かつけさせ給を、さらでもありぬべくおぼさるれど、すつべきことならねば、そこの人のなかをわけいでられけるなん、猶懈怠の失錯なりける。(日本古典文学大系21・第二巻08803実頼・佐理)

153 その夜はふけにければ、つとめてぞ、殿にまいらせ給へるに、内へまいらせ給はんとて、御装束のほどなれば、え申させ給はず。(日本古典文学大系21・第二巻106-15師尹・小一条院)

154 まこと、この式部卿のみやは、よにあはせたまへるかひあるおり一度おはしましたるは、御子日の日ぞかし。御をとゝのみこたちもまだおさなくおはしまして、かのみやおとなにおはしますほどなれば、世おぼえ・みかどの御もてなしもことにおもひまうさせたまふあまりに、その日こそは、御どもの上達部・殿上人などの狩装束・馬鞍まで内裏のうちにめしいれて御覽するは、またなき事とこそはうけたまはれ。(日本古典文学大系21・第三巻121-11師輔・為平親王)

155 「冬臨時祭の、日のくるゝ、あしきことなり。辰の時に人ゝ、まあれ」と宣旨くださせたまふを、「さぞおほせらるとも、巳午時にぞはじまらん」などおもひたまへりけるに、舞人の君達、装束たまりにまいりわさうじたりければ、みかどは御装束たてまつりてたゝせおはしましたりけるに、この入道殿も舞人にておはしましたりければ、このごろかたらせ給なるを、つたへてうけたまはるなり。(日本古典文学大系21・第三巻146-07/08伊尹・義懐)

156 「冬臨時祭の、日のくるゝ、あしきことなり。辰の時に人ゝ、まあれ」と宣旨くださせたまふを、「さぞおほせらるとも、巳午時にぞはじまらん」などおもひたまへりけるに、舞人の君達、装束たまりにまいりわさうじたりければ、みかどは御装束たてまつりてたゝせおはしましたりけるに、この入道殿も舞人にておはしましたりければ、このごろかたらせ給なるを、つたへてうけたまはるなり。(日本古典文学大系21・第三巻146-07/08伊尹・義懐)

157 この花山院は、風流者にさへおはしましけるこそ。御所つくらせ

たまへりしさまなどよ。御車やどりには、いたじきをおくにはたかく、はしはさがりて、おほきなるつまどをせさせ給へる、ゆへは、御くるまの装束をさながらたてさせたまひて、をのづからとみのことのおりに、とりあへずとをしひらかば、からゝと、人もてもふれぬさきにさしいださんがれうと、おもしろくおぼしめしよりたる事ぞかし。(日本古典文学大系21・第三巻152-01伊尹・花山天皇)

158 又、そのころ、いとかしきかんぎ侍き。賀茂のわかみやのつかせたまふとて、ふしてのみものをましゝかば、うちふしのみことぞ、よ人つけて侍りし。大入道殿にめしてものとはせ給けるに、いとかしこくまうせば、さしあたりたること・すぎにしかたのことはみなさいふことなれば、しかおぼしめしけるに、かなはせたまふことゝものいでくるまゝに、のちゝゝには、御装束たてまつりて、御冠をせさせたまで、御ひぎにまくらをせさせてぞ、ものはとせたまける。(日本古典文学大系21・第四巻168-15兼家)

159 おほかたこの大將殿たちのまいりたまへる、よのつねにていでたまふをば、いとほいなくゝちをしきことにおぼしめしたりけり。ものもおぼえず、御装束もひきみだりて、くるまきしせつゝ、人にかゝれてのり給をぞ、いとけうあることにせさせたまひける。たゞしこの殿御酔のほどよりはとくさむることをぞせさせたまひし。(日本古典文学大系21・第四巻176-07道隆)

160 帥殿に天下執行の宣旨くだしたてまつりに、この民部卿殿の、頭弁にてまいりたまへりけるに、御やまひいたくせめて御装束もえたてまつらざりければ、御直衣にて御簾のとにぬざりいでさせたまふに、なげしをおりわづらはせたまで、女装束御手にとりて、かたのやうにかづけさせ給しなん、いとあはれなりし。(日本古典文学大系21・第四巻178-02/04道隆)

161 このあはたどの、御おとこきんだちぞ三人おはせしが、太郎君は福足君と申しを、おさなき人はさのみこそはとおもへど、いとあさましうまさなうあしくぞおはせし。東三條殿の御賀に、このきみ舞をせさせたてまつらんとて、ならはせたまふほども、あやにくがり、すまひたまへど、よろづにをこづり、いのりをさへして、をしへきこえさするに、その日になりて、いみじうしたてたてまつりたまへるに、舞臺のうへのぼりたまひて、ものゝね調子ふきいづるほどに、わざはひかな、「あれはまはじ」とて、びづらひきみだり、御装束はらゝとひきやりたまふあはた殿御いろまあをにならせたまひて、あれかにもあらぬ御けしきなり。(日本古典文学大系21・第四卷199-08道兼)

162 中宮権大夫殿のみぞ、堅固御物忌にて、まいらせ給はざりし。さていみじく、ちおしがらせ給ける。中宮の御装束は権大夫殿せさせ給へりし、いときよらにてこそみえ侍りしか。(日本古典文学大系21・第五卷244-02藤氏物語)

163 皇太后宮は、そうじてから装束。かんのとのゝは、殿こそせさせたまへりしか。こと御方ゝゝのも、系かきなどせられたりときかせたまて、にはかに薄をしなどせられたりければ、入道殿御らんじて、「よき咒師の装束かな」とて、わらひ申させ給けり。(日本古典文学大系21・第五卷244-12/14藤氏物語)

164 とをもひて、とばかり御前にさぶらふにぞ、うちおどろかせ給さまにて、「御装束ははてぬるにや」とおほせらるゝに、「きかせ給はぬやうにてあらんと、おほしめしけるにこそ」ところえて、たちたうびける。(日本古典文学大系21・第五卷274-14/275-07昔物語)

165 さて、伊与へ渡給に、おほくの日あれしる日ともなく、うらゝゝ

となりて、そなたさまにをひ風ふきて、とぶがごとくまうでつき給ぬ。湯度々あみ、いみじう潔齋してきよまはりて、ひの装束して、やがて神の御前にてか給。神づかさどもめしいだしてうたせなど、よく法のごとくしてかへり給に、つゆおそるゝことなくて、すゑゝのふねにいたるまで、たひらかにのぼり給にき。(日本古典文学大系21・第二卷087-05実頼・佐理)

166 古今うかべ給へりときかせたまひて、みかど、こゝろみに本をかくして、女御にはみせさせ給はで、「やまと哥は」とあるをはじめにて、まづの句のことばをおほせられつゝ、とはせたまひけるに、いひたがへたまふ事、詞にても哥にても、なかりけり。かゝる事なむと、父おとゝはきゝたまひて、御装束して、手洗などして、所々に誦經などし、念じいりてぞおはしける。(日本古典文学大系21・第二卷096-13師尹・芳子)

167 つねの御ことなれば、法華經御くちにつぶやきて、紫檀のずゝの、水精の装束したるひきかくしてもちたまひける御よういなどの、いうにこそおはしましけれ。(日本古典文学大系21・第三卷138-05伊尹・義孝)

168 又、ついでなきことには侍れど、怪と人の申すことゝものさせることなくてやみにしは、前一条院の御即位日、大極殿の御装束すとて人々あつまりたるに、高御座の内に、髪つきたるものゝ頭の、血うちつたるを見付たりける、あさましく、いかゞすべきと行事思あつかひて、(日本古典文学大系21・第六卷274-14昔物語)

169 さてみかどよりひんがしさまにゐていだしまいらせ給に、晴明が家のまへをわたらせ給へば、みづからのこゑにて、手をおびたゞしくはたゝとうつなる。「みかどおりさせ給ふとみゆる天變ありつるが、すでになりにけりとみゆるかな。まいりてそうせん。車にさ

うぞくせよ」といふこゑをきかせ給ひけん、さりともあはれにおぼしめしけんかし。(日本古典文学大系21・第一巻052-13花山院)

170 輪つよき御くるまにいちもちの御くるまうしかけて、御烏帽子・直衣いとあざやかにさうぞかせ給て、えびぞめの織物の御差貫すこしおいでさせ給て、祭のかへさに紫野はしらせ給君達のやうに、ふみいたにいとながやかにふみしだかせ給て、くゝりはつちにひかれ、すだれいとたかやかにまきあげて、雑色五六十人ばかりこゑのあるかぎりひまなく御さきまいらせ給。(日本古典文学大系21・第四巻194-15道隆・隆家)

大鏡に先行すると考えられる栄華物語⁽⁹⁾では、名詞形41例に対し、動詞形11例を見出す。他の文献にはない「しらさうぞく(白装束)」のような複合語も含まれている。見出し語と例数のみを掲げておく。

さうぞく	12例	御さうぞくせ	1例
装束	1例	さうぞくし	2例
御さうぞく	15例	御さうぞくし	2例
かりさうぞく	2例		
しらさうぞく	6例	さうぞき	5例
女のさうぞく	3例	さうぞきかへ	1例

7 その他における諸例の分析

これまで分析を試みた諸文献の他に、竹取物語⁽¹⁰⁾、伊勢物語⁽¹¹⁾・和泉式部日記⁽¹²⁾、大和物語⁽¹³⁾・堤中納言物語⁽¹⁴⁾についても俯瞰してきた。名詞形は「さうぞく」であり、サ変動詞を除く動詞形は「さうぞき」を基本としている。なお、落窪物語⁽¹⁵⁾については、紙数の都合により、概数のみを報告しておく。名詞形「さうぞく」23例、サ変動詞形「さうぞくし・さうぞくする」2例、動詞形「さうぞき」とその複合語は11例、

また「さうぞかせ」1例を見出す。

171 立てる人どもは、装束のきよらなること、物にも似ず。飛ぶ車一つ具したり。羅蓋さしたり。(竹取物語／新日本古典文学大系17・069-11) *天理図書館本には振り仮名で「しやうぞく」とあり。

172 むかし、県へゆく人に、馬のはなむせむとて、呼びて、うとき人にしあらざりければ、いゑ刀自、杯さゝせて、女のさうぞくかづけむとす。(伊勢物語／新日本古典文学大系17・122-05四十四段)

173 御まへに人人して、御ものがたりしておはします程なりけり。人まかでなどして、右近の尉、さし出でたれば、れいの車にさうぞくせよとて、おはします。(和泉式部日記／日本古典文学大系20・412-05)

173 さて、とかう女さすらへて、ある人のやむごとなき所に宮たてたり。さて宮仕へしありく程に、さうぞくきよげにし、むつかしきことなどもなくてありければ、いときよげに顔容貌もなりにけり。(大和物語／日本古典文学大系9・317-06百四十八段)

175 としごろおもひかはしてすむに、この女いとわろくなりにければ、思ひわづらひて、かぎりなくおもひながら妻をまうけてけり。このいまのめは富みたる女になむありける。ことにおもはねど、行けばいみじういたはり、身のさうぞくもいときよらにせさせけり。(大和物語／日本古典文学大系9・320-09百四十九段)

176 ある局ちかう居て行へば、この女、導師にいふやう、「この人かくなりたるを、生きて世にある物ならば、今一度あひみせたまへ。身をなげ死にたる物ならば、その道成し給へ。さてなむ死にたると

も、この人のあらむやうを夢にてもうつゝにても聞き見せたまへ」といひて、わがさうぞく、上下・帯・太刀までみな誦經にしけり。(大和物語／日本古典文学大系9・337-06百六十八段)

177 はじめは何人の詣でたるならむと聞きぬたるに、わが上をかく申しつゝ、わがさうぞくなどをかく誦經にするをみるに、心も肝もなく悲しきこと物に似ず。(大和物語／日本古典文学大系9・337-08百六十八段)

178 洲浜、南の高欄におかせて、はいいりぬ。やをらみ通し給へば、たゞ同じほどなる若き人ども、廿人ばかりさうぞきて、格子あげそゝくめり。(堤中納言物語／新日本古典文学大系26・0957-10貝あはせ)

179 櫛の箱をとりよせて、白き物をつくると思ひたれば、とりたがへて、掃墨いりたるたう紙を、とりいでて、鏡もみず、うちさうぞきて、女は「そこにてしばし。な入り給ひそ」といへ」とて、ぜひも知らず、きしつくるほどに、(堤中納言物語／新日本古典文学大系26・092-10はいずみ)

結語

以上を要するに、平安時代中期を中心とした仮名文献において、漢語「装束」は次のような受容と定着を経たことが認められる。なお、蜻蛉日記150「わきてさうぞけば」に関して、従来は四段動詞の已然形として扱われてきたが、孤例であること点をも考慮しつつ、類似性の高い046「さうぞきわけて」の倒置的な用法と認定する。

名詞形「さうぞく」

(イ) K入声音漢語の末子音処理は原則的に「ク」あるいは「キ」である。

(ロ) 基本形は「さうぞく」であるが、「さうぞく」「じやうぞく」もある。動詞形「さうぞき」

(ハ) 「さうぞく+き(装束+着)」を内在的に意識している。

(ニ) その場合は連続する力行音となるために、音変化を起しやすい。

(ホ) さらに「さうぞ+き」という語形分析を可能にするようになる。

動詞形「さうぞかせ」

(ヘ) 右の環境を受容しつつ、他動詞の複合語「さうぞ+かせ」として形成された。

[注]

(1) 新潮古典集成『枕草子』上・下(新潮社、昭和52年4・5月)

(2) 今泉忠義他編『源氏物語全』(おうふう、昭和52年1月)

池田亀鑑編著『源氏物語大成』普及版(中央公論社、昭和59年10月)60年11月) ▼検索は大成を使用し、本文は首書源氏物語である『源氏物語全』を採用した。

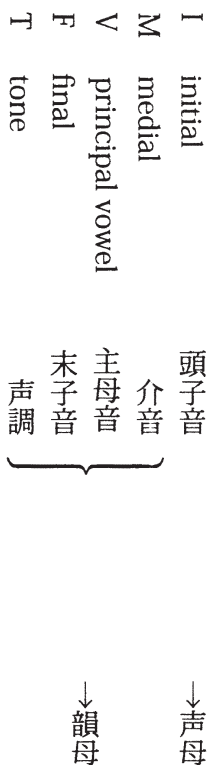
(3) 新日本古典文学大系24『土佐日記・蜻蛉日記・紫式部日記・更級日記』(岩波書店、平成元年11月)所収の『紫式部日記』

(4) 新日本古典文学大系24『土佐日記・蜻蛉日記・紫式部日記・更級日記』(岩波書店、平成元年11月)所収の『蜻蛉日記』

(5) 日本古典文学大系21『大鏡』(岩波書店、昭和35年9月)

(6) 一般的に、中国語の音節構造は「MVF」で示される。等韻学の

述語である声母・韻母との関係も加えておく。



(7) 柏谷嘉弘『日本漢語の系譜―その撮取と表現―』(昭和62年7月) ▼776～772頁および810～819頁を参照した。

(8) 柏谷嘉弘『日本漢語の系譜―その撮取と表現―』(昭和62年7月)

月) ▼761頁を参照した。

- (9) 日本古典文学大系75・76 『栄花物語』上・下(岩波書店、昭和39年11月・昭和40月10)
- (10) 新日本古典文学大系17 『竹取物語・伊勢物語』(岩波書店、平成9年1月) 所収の『竹取物語』
- (11) 新日本古典文学大系17 『竹取物語・伊勢物語』(岩波書店、平成9年1月) 所収の『伊勢物語』
- (12) 日本古典文学大系20 『土左日記・かげろふ日記・和泉式部日記・更級日記』(岩波書店、昭和32年12月) 所収の『和泉式部日記』
- (13) 日本古典文学大系9 『竹取物語・伊勢物語・大和物語』(岩波書店、昭和32年10月) 所収の『大和物語』
- (14) 新日本古典文学大系26 『堤中納言物語・とりかへばや物語』(岩波書店、平成4年3月) 所収の『堤中納言物語』
- (15) 新日本古典文学大系18 『落窪物語・住吉物語』(岩波書店、平成4年3月) 所収の『落窪物語』

* 諸文献の検索にあたっては、インターネット上で公開されている検索エンジン、あるいは電子テキストを活用した。

古典総合研究所の語彙検索

<http://www.genji.co.jp/kensaku.htm>

国文学研究資料館の電子資料館

http://www.nijl.ac.jp/contents/d_library/index.html